

一人ひとりの子どもと大人が共にその場をつくることとしての集団活動

～校外活動の事例をとおして～

○橋本高子（愛育養護学校）

佐治由美子（愛育養護学校）

【はじめに】

保育の中で集団活動を行うとき、その中にも個々の子どもの参加の仕方や楽しみ方があり、それぞれの取り組み¹があることを実感する。その一方で、集団活動の中では一人ひとりの子どもの思いに応じることは難しいと感じることもある。難しさを抱えつつも何とか一人ひとりの子どもの思いやあり方を大事にしようとしながら進めることで、子ども一人ひとりが主体的にその活動に取り組み、それぞれの子どものにとってより意味ある活動になっていくことがある。子どもたちが自分の思いや考えを出し合って互いに調整しつながり合って全体の流れをつくってくとき、保育者もまたその場に主体的にかかわり、前もって予定したことに子どもを導くことを超え、その場を子どもたちと共につくる面白みと楽しさを感じることができる。

ここでは、集団活動を「一人ひとりの子どもと大人²がそれぞれの思いや考えを出し合って共にその場をつくること」³として捉えることで、集団活動のあり方についてその可能性を考えてみたい。

【方法】

愛育養護学校（特別支援学校）の4・5・6年生クラスの校外活動（2018年5月）の場面を事例として取り上げ、考察を加える。

【事例と考察】

4・5・6年生クラスの子ども5名、担任3名（筆者を含め2名が常勤、1名が週2日の非常勤）、実習生2名で代々木公園へサイクリングに出かけた。公園の森林の中を1周10分ほどで回れるサイクリングコースがあり、大人と子どものペアで二人乗り自転車に乗る。子どもたちは3年次より代々木公園でのサイクリングを年に1～2回経験している。このクラス編成になって出かけるのは2回目である。

（場面1）サイクリング場に到着

サイクリング場に着き、各自券売機でチケットを買う。

J(4年生):「J、乗らない。ここで待ってる。」

保育者H(筆者):「Jくん、一緒に乗ろうよ。」

J:「ううん、待ってる。行ってらっしゃーい！」

(Hと自転車に乗ろうとしている皆に向かって手を振る)

H:「そうかあ。・・・じゃあ、Jくん、ベンチでお姉さん(この日一日のみの実習生)と待っている？」

（考察1）

Jは自転車に乗りたい気持ちがあっても何か気持ちの引っかけがあり「乗らない」と言っている場合もあるように思い、「一緒に乗ろう」と誘うやりとりの中でJの考えが見えてくるかも知れないと考えた。Jは間髪入れず強い調子で、

筆者に引っ張られないようにするかのように明言したので、ここではJが自分の選択を貫くことが重要に思えた。そのため、自転車に乗らずに皆を待つことが、自ら選んだ積極的な行為としてJの中にも仲間の中にも位置づき、Jも楽しい時間を過ごせるようにと願い、サイクリングコース沿いにあるベンチに座わることを勧めた。また、Jが選んだ過ごし方を大事にしたいと思っていることを表明したい思いもあった。

（場面2）サイクリング出発前

S(6年生)が皆を代表して申し込みをした後で、自転車が並んでいるところへやって来る。既に他の子どもたちはそれぞれに自転車に乗っている。Sは、「こっちにする。どいて！」などと言って友だちに自転車を替えてもらおうとする。R(6年生)は、自分が座っているサドルにSが座ろうとすると、Sのことを手で押し返す。C(5年生)は実習生Kと乗っていて、SがCを降ろそうとすると、「いやー！」と言って降りない。Y(5年生)は保育者Aと乗って歌をロズさみ、ハンドルをしっかりと握って降りようしない。

H:「Sちゃん、色は違うけど、どれも同じ自転車だよ。これも速いよ。」
(中略)

SはしばらくしてHの手をとり、Hと一緒に空いていた自転車に乗る。

（考察2）

Sはサイクリングで一番になるためにどの自転車に乗るかを真剣に考えているのだと思った。自分が来た時には1台しか残っておらず、それより有利な自転車があるのではないかと心配になっているようにも感じられた。Sが安心して自転車に乗れるようにしたいと思い、どの自転車でもSは速く漕げることを伝えるとき同時に、Sが納得できるまでSなりに交渉するのを待ちたいと思った。結果的にはSは誰にも自転車を替えてもらえなかったが、残っていた1台にそのまま乗るのではなく、友だちと替えてもらうことを思いつき、友だちに掛け合ってみる過程を経たことで、改めて残された1台に主体的に乗ることができたのではないだろうか。

（場面3）1周して出発地点に到着

Sは自転車をいっしょうけんめいに漕いで、一番に出発地点に到着する。Jはベンチから戻って来ていて、Sを出迎える。

J:「おかえりー！」

H:「あー、Jくんここでお迎えしてくれたの？ありがとう！」

Hは自転車を一度停める。Sはサドルに乗ったまま。

J:「Sちゃん、ヘルメット、返してくるね！」(Sに向かって手を出し、ヘルメットを自分に渡すよう促す)

H:「おおーう、そうかあ。Sちゃん、Jくんがヘルメット返しに行ってくれるんだって。」

(考察3)

通常はサイクリングコースを2周しているため、Sは2周目に行きたいのではないかと思い、Sがヘルメットを外すことをどのように思うのかを伺うつもりで、Jの言葉をそのまま伝えた。Sは一番になったことに満足している様子で、ヘルメットを取ることに抵抗がなくヘルメットのバンドを外そうとしていたのでそれを手伝うことにした。また、サイクリングではみんなを「待つ」人だったJが、自ら友だちに働きかけ、全体の動きをつくろうとしていることを応援したい気持ちもあった。

(場面4) 弁当の時間へ

Jは、Sがかぶっていたヘルメットを受けとって、一人で管理室の方へ行く。係の方に「ありがとうございました！」と言って、返却ボックスを示され、そこに返却しているJの姿が見える。

(中略)

J:「じゃあ、行くよ！」

Jは先頭を歩き出し、いつも弁当を食べている売店のある休憩スペースへ向かう。子どもたちがそれぞれのペースでJの後に続き、そのまま昼食になる。

(考察4)

Jは生活の中で弁当の時間⁴をととても大切にしている、楽しみにしている。低学年のころは午前中早いうちに弁当を開き何回かに分けて食べていたが、4年生になって友だちを誘ったり待たせたりして友だちと一緒に食べるようになった。早く弁当を食べたかったJは、みんなが2周目に出発する前にサイクリングを終えて弁当を食べる流れを自らつくり、みんなと一緒に弁当を食べられるようにしたのではないだろうか。

(まとめ)

保育の中で自然に生まれる数人での遊びや活動とは違い、集団での活動を予め設定するときには、保育者から見た子どもたちの興味や体験してほしいことを軸に大人が活動を組み立て計画する。事例の校外活動では、自然の中で身体を動かす、仲間と共に過ごす、公共の乗り物や売店の利用を通して社会と出会うなどが活動の軸にある。しかし、実際に活動を進めていくと、保育者はもっと多様な子ども一人ひとりの興味や思いに出会う。集団として一定の方向性を持ちながらも、子どもたち一人ひとりのそのときそのときの思いを大事にしようとする中で、子どもたちは保育者が想定したことを超えた経験をし、それぞれにとっての活動の意味がより豊かになることがあるのだと思う。事例のJは日常の様々な場面でも、自分で選んだことを自分の力でやってみることに取り組んでおり、Jにとっては校外活動も状況に合わせてそのことに挑戦する場であった。そしてそれを実現させることが、自分の思いとまわりとが折り合うところを見つけて友だちに働きかけ仲間をリードすることにもつながっていた。Sは日々の活動を通し、思い描いたことを自分で考えて工夫し形にすることに取り組んでおり、サイクリングでも自ら設定した目

標を達成するためにどうしたらいいかを自分なりに考え実行しようとする姿があった。その過程では、自分の思いを表現しながら相手の思いに出合いそれをSなりの道筋の中で受け入れて調整していた。場合によっては一見、集団から外れたり流れを乱したりするようにも見えるかも知れない一人ひとりの時間をくぐって、子どもたちはその場に主体的に参加しているのではないだろうか。そして、一人の子どもの主体的な動きが集団としての動きをつくり、一人の子どもの思いが他の子どもの思いと出合い子ども同士がつながり合って活動が形づくられていく。このことは、個が生きる集団活動のあり方の一つの可能性を示唆してくれる。

一方、保育者は子ども一人ひとりから出てくるものをどう受けとりその場においてどう考えどのように応じるかを自身で判断して動き、主体的にその場にかかわることで全体の動きをつくっていく。それは同時に、個性も子ども一人ひとりとの関係性もそれぞれである。実習生を含んだ保育者間での協働に取り組むことでもある(発表当日は本事例の中で保育者の協働にかかわる場面にもふれた)。一人の保育者と子どもとの間で起きていることに別の保育者がかかわることで次の展開が生まれたり、一人の判断と動きを受けてもう一人がその次の判断と動きをつないでいったりして全体の動きがつくられていく。そこには、一人ひとりが安心して自分自身でいられる流動的で柔軟な集団のあり方があると言えるだろう。

「一人ひとりの子どもと大人がそれぞれの思いや考えを出し合って共にその場をつくること」としての集団活動を保育の中で実現していくことは、それぞれの背景や経験、感じ方や考え方を持つ一人ひとりが、いかに個を発揮し合って豊かな集団になれるかという社会の普遍的な課題に取り組んでいることでもある。日々の保育の中に社会のあり方に対する模索があり、またその実現もあるのだということを自覚し、今後も考えを深めていきたい。

¹ 「取り組み」は、表面的な活動内容だけでなく、活動のその人にとっての意味、活動を通してその人がやっていることやろうとしていること、日常の様々な場面においてもその人が取り組んでいること、と考える。

² 「大人」は、保育者や実習生、ボランティアなど、それぞれの立場や経験、感性や考えを生かして子どもたちと共にその場をつくる一員、と考える。

³ 一人ひとりの子どもが思いを出すには、特別な支援を必要とする子どもたちの場合、保育者が子どもの思いをより丁寧に聞いて受けとり、それがまわりの人の中で表現されるのを援助する必要がある。

⁴ 愛育養護学校では、一日の生活の流れは基本的には一人ひとりの子どもに任されている。昼食も決まった時間に一齐に食べるスタイルではなく、子どもたちそれぞれのリズムとペースに合わせ、数人で誘い合って食べるなどしている。